第１７１号
平成１５年１２月
© 2003
E-mail :
shimz@mb.infoweb.ne.jp
LDG04167@nifty.ne.jp

SCだより

編集発行人
清水吉男
（株）システムクリエイツ
横浜市緑区中山町 869-9
電話/FAX 045-933-0379

Café りふれ

36回め

MENU
特製ブレンド 380
レモンティー 350
日替りケーキ 300
ぷろせす 無料
アルコールは置いていません

いよいよ、年の瀬も押し迫ってきたが、店に来るＳＥ達の半分ぐらいは、年末のぎりぎりまで仕事をしているようだ。

「こんにちわ」
と言って、いつものエンジニアが大勢連れてやってきた。
「いらっしゃい。今日は大勢でどうしたの？」
という間に、カウンターに一列で席に着いた。
「ようやく、仕事の区切りがついたので、今日は皆で帰るところです」
といつも顔を出すリーダー格の彼が言った。
「その前に、マスターの所に年末の挨拶に顔を出しておこうということです」
「そりゃ嬉しいね。ところで、皆さんコーヒーでいいのかな？」
リーダー格の彼が皆の方を見て確認して、
「ブレンドコーヒーを５つお願いします」

「ところで、仕事の方は終わったのかな？」
「完了はしていないけど、今年中に対応する約束のバグの方が片づいたところです」
「ということは、年明けに延長戦が残っているわけだ。正月も落ち着かないね」
「でも、そんなことを思っていても仕方がないので、正月は気分転換することにします。なぁみんな」といって仲間の方に顔を向けた。カウンターの他の人たちも、「そうです」と言ってリーダーに同調した。
話しが途切れたのと、“気分転換”という言葉が気になったので、
「みなさんにとって、今年の仕事振りはどうだったのかな？」
と誘い水をかけてみた。
ちょうど、そこでコーヒーが入った。

「いや〜、今年も大変でしたね。仕様の変更が多くて、作業が何度も後戻りです」
「仕様の書き方は変えなかったの？」
「夏にマスターに教えてもらったように変えようと思ったのですが、客先との話しができないまま、今まで通りの形で進んでしまいました」
「で、結局同じことを繰り返したわけだ。う〜ん、もったいないことをしたね」
「今思えば、どのように切り出すか迷っている間に、タイミングを逸した感じですね」
「人から聞いただけで、自分で“これで行けそうだ”という感触を掴んでいない状態では提案もできないだろう」
「確かにそうでした。マスターがいつもおっしゃっている“試行”とか“稽古”の必要性が良く分かりました。思ったとき、知ったときにやってみないと、実際には何も変化させることができないですね」
「気がつくのが遅いけど、でも気付いた時にどう行動するかだね」と突っ込んでみた。
「はい、そこで正月の間に、仕様の変更が多かった機能について、マスターに教えてもらった方法で書いてみようということで、メンバーの中で手分けして来たところです」
「おう、今度は行動に移したわけだ。少しは学習したということだね」
「整理し直しているうちに、仕様のモレに気付くことがあるかもしれませんからね」
「“気分転換”って、こういうことかね？」
「そうです。今までの正月の過ごし方と変えてみようということです」
「皆で話しをして、正月の間に少しでも考え方を変えようということになったのです」
「ほう、どういう風の吹き回しかね」

「いや〜、いつまでもこんなやり方で通用するとは思えませんからね」
「こんなやり方とは？」
「バグに追われて納期は守れないし、工数は大幅にオーバーだし」
「私たちもくたくたで、このままではぼろぼろになって捨てられてお終いになっちゃいます」
「第一、仕事が楽しくないですからね」
「この何年か振り返って見て、自分たちの能力も上がっていませんしね」
と次々と言葉が出てきた。
どうやら、このリーダーは、リーダーという立場を離れて自分の思いを皆の前にさらけ出したようだ。そうしてみんなの思いを一つの方向に引き出すことに成功したのかもしれない。だが、それだけでここまで心を掴めるだろうか。他に何かやったのではとの思いから、
「あなた達は、単に現状を反省したというだけではないね。何かデータでも取ったのかな？」
「マスターには見えているのですね」と、リーダー格の彼がニコッと笑って言った。
「はい、精度にはムラがありますが、生産性のデータとか品質のデータを整理してみました」
「２年ぐらい前までのプロジェクトのデータがありましたので」
ここでも、言葉が連携してでてくる。考えていることが同じで、互いに通じているのだろう。
「どうして、此処に来てデータを整理してみようと思ったの？」
「マスターの話しを聞いていて、確かに顧客が求める納期が短くなったという気がしました。そこで、このままでは潰されると思ったので、データで確かめてみようと思ったのです」
「私も、同じようなことを感じていましたので、リーダーから話しを聞いて、それじゃデータを調べてみようということになったのです」
「そうして調べてみると、工数の割に、１人の生産量があまりにも少ないことに愕然としました。マスターが言うように、うまく出来れば月に３０００行は書けるという気持ちはありますが、実際に調べてみると、６ヶ月で６０００行前後しか書けていないことが分かったのです。月にして１０００行ですからね」
「そうか。自分たちの生産性の低さに気がついたわけだ」
「はい、生産性を落としている理由は、バグの対応に実施工数全体の３分の１を占めていることと、仕様の変更による後戻り作業で５分の１の工数を使っていたのです」
「原因の大部分が初期の要求仕様の不備にあるということで意見が一致したわけです」
「もっとうまくやれば、少なくとも工数を３割短縮することも不可能ではないと思えるようになりました」
「データってすごいんですね。こんなことが分かるとは思いませんでした」
「今までは、データって“管理される”ための証拠のようなものだと思っていました」
「でも、実際に取ってみて、これは自分たちのためのものだということが分かりました」
相変わらず、話しが連携している。それに私が言葉を挟むタイミングがない！
「どうやら、皆さんは、来年はきっと良い形で仕事ができそうだね」
「そうしたいと思っています」とリーダーがきっぱりと言った。
そういうリーダーの顔を、カウンターを囲んで仲間の皆が見入ってる。
久しぶりにこういう光景を目にした。気がつくのが少し遅かったが、それでもまとまって行動すれば間に合うだろう。いや、天は必ず彼らの味方をするだろう。

「ところで、マスターはいつも、プロセスの改善は品質の改善だけが目的ではないと、おっしゃっていますが、今日は、そこの話しをもう少し聞かせてもらえますか」
「私たちは、品質を改善するためにプロセスを改善すると考えてきました」
「確かに、一般にはそのように思われているかも知れないね。ＣＭＭやISO-900xなどは品質の改善が叫ばれたときに提案されたしね。それはそうと、品質を改善するには、合理的なプロセスを安定させることと、レビューなどの冗長プロセスを幾らか加えれば良いことは分かるね」
「それは分かります。だから何年も“こなれたプロセス”を使おうとするわけですね」
「そう。だが1990年代に入って、納期の短縮要求が出た」
「Agile とか自動生成ツールやシミュレーションのツールなどは、この要求に応えるものですよね」
「このあと更にコストの要求が出てきたが、これらの要求に応えるにはプロセスを変化させることが必要になる」
「どう、変化させるかが問題ですね」
「それに、安定と変化という２つの相反する要求にどうやって応えるかもポイントですね」
「そう、今日でのプロセスの改善は、“安定”と“変化”の両方に応えるものでなければ意味がないというのが、私の持論でね」
「だいたい分かりました。これも正月休みの間に考えたいと思います。なぁ、みんな」
「はい、皆で考えてみます」
年の最後に、こういう人たちが出てきてくれた。来年はどんな顔を見せてくれるのだろう。そう思うと今年最後の片付けも楽しくなる。◆

・データは管理者のものではなく、自分たちの向上のために取る。
・プロセス改善はＱＣＤのすべてに作用させなければならない

(C) Copyright 2003 System Creates Inc., All rights reserved

暁の鐘の音 154

変質する日本

自衛隊をイラクへ派兵することが決定した。部隊の編成も完了し、年末になって航空自衛隊の先遣隊が慌ただしく出発した。自衛隊を国外に出すことについては、過去に何度も議論が繰り返され、その度に時の政府は封印された箱のフタを開けることを躊躇した。少なくとも、先の戦争を体験してきた政治家は、鍵を開けられなかった。

＊　★　＊

ところが今回は、国連の要請でもなく、単にアメリカの要請に協力するという形で、簡単に自衛隊の海外派兵が決った。もっとも、「人道支援」という建前になっているが、それは兵を出す側の論理に過ぎない。こうも簡単に決ってしまうと、過去の論争はいったい何だったのだろうかと思ってしまう。鉄の壁と思われていたものが、いざ片手を突いてみるとその壁はまるで障子紙で出来ていたかのように簡単に破れた。戦後も五八年を過ぎ、戦後世代が人口の大半を占めるようになったことが、壁を変質させたのかもしれない。

＊　★　＊

それにしても、安保闘争を経験してきた世代の目から見ても、たいした国民的合意もなく、タイミング良く発生した北朝鮮の脅威を利用する形で、イラクへの「特粗法」は、憲法の問題に触れることなく国会で可決された。先の衆院選挙でも、政府はこの問題を争点から外し、国民の目を年金問題にくぎ付けにして選挙を乗り切った。今おそらく、小泉首相の胸中は、「意外と簡単だったな」というところだろう。日本は変わったのか。

＊　★　＊

「特粗法」は、自衛隊は“安全”な地域に入るということになっているが、今の状態で安全な地域というものは無いだろう。いや、自衛隊が入ったことで、その地域は安全ではなくなる可能性も否定できない。今となっては、草の根のように続けてきた日本のNGOとの連携は考えられないだろうから、イラクの国民、特に自衛隊が入る地域の人たちに対して、真意の説明を繰り返すしかないだろう。

本当に、イラクの人たちが望むもの、例えば仕事の場を提供することができれば受け入れてくれるかも知れないが、もとより自衛隊は「自己完結型組織」として派兵される以上、現地の人たちを雇用する可能性は低く、歓迎されざる状態になる危険は否定できない。政府もこのような危険があることは百も承知のはずだ。それを承知で派兵するのは、単にブッシュ大統領との約束の遵守というだかけなのか。日米同盟に対する縛りなのか。

＊　★　＊

北朝鮮のお陰（？）で、今や「自衛隊は軍隊かどうか」という議論は過去のものとなった。９・１１の同時テロ以降のアメリカの行動のお陰（？）で、自衛隊の海外派兵も、あっさりと壁を越えた。だが、その背後には、日本人の意識の変化がある。そしてそれは、外国から見れば、「ナショナリズム」の台頭に見えるはずだ。彼らには、今まで眠っていた日本の「ナショナリズム」が目を覚ましたと映るだろう。門外不出だった自衛隊の海外派兵が、国を二分するほどの議論もなく、国会で血みどろの攻防もなく、あっさりと通ってしまう国が、いったい何処にあるだろうか。

＊　★　＊

もし、派兵した自衛隊の部隊に攻撃が仕掛けられ、交戦の中で死傷者を出したとき、日本の国内の世論はどっちに動くだろうか。それみたことか、危険だから早く引き上げるべきという議論が大勢を占めるか。それとも人道支援に行った者に攻撃を仕掛けるなんて許せないとイラクを敵視する風潮が表面化するか。もっとも、政府としては兵を引けないだろう。あるいはまた、アルカイーダの予告通りに東京が「テロ」の攻撃を受けた場合はどうだろうか。

＊　★　＊

もちろん、国内の世論は二つに割れるだろう。だが、確実に「ナショナリズム」が盛り上がることが予想される。「９・１１」の後のアメリカ国内が一時的にも「ナショナリズム」で染まったように。いや、日本の場合、民族の多様性が薄い分だけ、「ナショナリズム」に点火した火を消せない可能性もある。

もっとも、戦後五〇年を過ぎて「ナショナリズム」という言葉は、すでに死語になっているのかも知れない。だが、そのことは決して歓迎すべきことではない。言葉を持たないということは、そこに起きている状況を認識できないことを意味する。イラクから送られてくるニュースに対する国民一人ひとりの感情が「ナショナリズム」として認識できないまま、後戻りできない状態に誘導される可能性がある。それは日本の歴史が証明している。マスコミもその危険を感じながらも、報道せざるを得ない状況に抗しきれるかどうか。この点に付いても過去から学習したとは思えない。

日本は変わったのか？ ■

今月の一言

「長期にわたって支配下におかれ、その下で生きるのに慣れてしまった人民は、なにかの偶然で転がり込んできた自由を手にしても、それを活用することができない」（塩野七生著「マキアヴェリ語録」より引用）

一〇年前にこの本を読んだとき、これは日本のことだと思った。少なくとも、日本人は、自らの力で「自由」を手にしたのではない。敗戦という事態を契機に、「主権在民」という名の下で、多くの「自由」が国民の手の中に転がり込んできた。「自由」と「平等」という言葉は、支配からの解放を意味したが、この五〇年の間、それを正しく活用したかどうかは、はなはだ怪しい。

いったい、「自由」はどこに使われたのか。たとえば、「自由」は「多様性」となって現れてくる。いろんな民族が集まって、いろんな発想がぶつかって、新しい文化を創造する力となる。それは、企業活動だけでなく、学校の中にも現れても良いはずだし、農業や地域社会に現れてもよいはずだ。だが、現実にはどこにも多様性はない。だから、景気の浮き沈みは、国全体の浮沈となる。

二一世紀に入って、同じことがアフガニスタンで起きた。「偶然転がり込んできた自由」という意味では日本の比ではない。それまでアフガニスタンの国民は自由を抑圧された環境の中で身を縮めて生きてきた。その状況は多くの報道で、世界中の人たちが知っていた。突然、「テロ集団を駆逐する」という名の下でアメリカ軍がやって来て、想像を超えた武器力によって、当時のタリバン政権をあっという間に倒してしまった。

そうして偶然に転がり込んできた自由も、うまく活用されないまま、部族間の闘争に入ろうとしている。「自由」は、「正義」の名の下に武器を持って戦う自由にも成り得るのだ。長く戦いを続けてきた人たちには、その選択しかない。少なくともしばらくはそれしかないのかも知れない。

そして、イラクも、まもなくこれと同じ状態に陥るだろう。